

墨染ノ残花

またたび猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本の山奥に存在する妖怪・妖精・神霊や人間などが混じりながら暮らす『博麗大結界』で隔離

された『箱庭の世界』のこと『幻想郷』で

『一人の人物』が現れる。

そして1000年前から錆びついて止まっていた『因縁』と『運命の歯車』が今、動き出す……

例え、この身が■■■■の美しさ魅入られて■と

■■■■に染まりきって失ってしまおうとも……

目次

墨染の来訪者編

貌なき法師

1

妖怪の賢者と西行妖

19

禁忌の能力と深淵の能力

39

春雪異変編

墨染の■者

54

賢者の依頼と人形使い

78

自己犠牲の信念

94

境界と墨染

110

墨染の来訪者編 貌なき法師

美しくも悍ましいあの■■■■を見てみると
昨日のように思い出す。

それは美しく儂げで神秘的な■■■■の■■■■が
舞う中、寂しそうに佇む『あの方』の姿を

そして『あの人』と初めて出会ったあの時の
『運命の出会い』のことを――

そして――

「あ、あなたは…一体、何がしたいんですか!!？」

一人の少女は膝から地面に付いて砂利を
【ジャリ…】と音を立ててながら右手には握り拳
を作って目の前で血塗れの人物を睨みつけた。

なぜなら目の前にはこの身どうなろうと守るべき
『大切な我が主人』が倒れているからだ。

私が睨みつけているのに『目の前の人物』は無機質で光のない死んだような魚の目で私の姿を見るがその瞳には私は写っていないと分かる。

「■■■■のお前ではー」

更には『その人物』は冷たい声で私に発して視界を『目の前のある物』に向けて眺めていた。

何故、このような状態になってしまったのだろう…

己の大切な主人を守れず無力で未熟な自分を無能だと恥だと感じてしまう…

だが、一つだけ分かることがある。

自分はきつとー

私、魂魄妖夢はいつものように朝早く起きてまず、することは沢山あって大変である。

掃除や洗濯、この屋敷、『白玉楼』の掃除。

そして

「よ〜う〜む〜♪　　ご飯はまだかしら？」

「はーい！ただいま準備します!!？」

何より一番大変なのが我が主人である

『西行寺 幽々子様』のお食事についてだ。

ごはんなどの量は重箱で朝ごはんは四段、
お昼ご飯は八段ぐらいのお弁当箱を用意
しとかなければ幽々様は満足なさらない。
だから料理を沢山作らなければならない……

エプロンを着てお昼の料理のメニューを考える。

「うーん…朝は味噌汁と鯖の味噌汁煮など
したから…お昼はがつりした料理が良い
だろうか？　それともー」

妖夢が考えた結果、唐揚げなどの料理に
して作り始める。

トントントントン、ジュウージュウージュウー

とキャベツや鶏肉などを包丁で軽々と捌き

鍋に油を入れて揚げて料理を盛り付けて
幽々子様の元へと持っていく。

「お待たせしました!!？」

「待ってたわ〜妖夢〜♪」

幽々子様が私にそう言うとは私はテーブルの上
には埋め尽くさんとする大量の料理を急いで
目の前に置く。

「では、幽々子様、剣の素振りをしてきます」

「程々にね〜」

幽々子様は笑顔でそう言って唐揚げをモグモグと
とても幸せそうな表情で頬張りながら食べていた。

「さて、剣術の修練をしますか…」

妖夢はそう言って外に出て素振り用の木刀を
手に取って構えようとしていると

「ごめんください」

ん？誰だろうか？

「はーい」

妖夢は手に持っていた木刀を元の場所に戻して
白玉楼の門の前に行く

「いきなりの訪問ですまない…」

今、大丈夫だろうか？」

「はい、問題ありません…」

妖夢は目の前の人物を警戒した。目の前にいた
人物は虚無僧笠を被った人物が目の前に立って
いたからだ。

「そう身構えないでくれ…」

妖夢が低い声を出しながら警戒していた。

「では、何のようでしょうか？」

妖夢が警戒するのは無理もない何故ならその人物は
虚無僧笠を被って『漆黒の錫杖』を持った人物に
妖夢がそう問うと

『妖忌殿にようがあつてこちらに参った』

「我が、祖父に…?」

妖夢は驚いて目を丸くした。いきなり我が祖父
であり『剣の師』である『魂魄妖忌』の名前を
知っていたからだ。

「すみませんおじいちゃんーお師匠様は
いません」

妖夢は妖忌のことを『お爺ちゃん』と言いかけた
時に「はっ！」と気付いたのか「ごほん!!？」と
咳払いしてお師匠様と呼び方を変えた。

祖父である魂魄妖忌は私と同じ半人半霊で白玉楼
の護衛剣や兼庭師を300年務めた西行寺家先代庭師
であった。

しかし『ある日』を境に頓悟したせいかわい私に
300年務めた庭師の御役目を受け継がせて行方を
くらませた。

「そうか…では、現在の『剣術指南役兼庭師』
を呼んで来てもらえないだろうか？」

虚無僧の方はキョロキョロと見渡しながら妖夢に
優しくそう言う

「私がお師匠様の跡を受け継いだ現在の
『剣術指南役兼庭師』である『魂魄妖夢』です!!？」

この人は悪気があって言ってるのではないと
分かってはいたけどやはり、許せない!!？

なんて失礼人だろう…!!？

「そうか…妖忌殿の…愛娘殿か……」

虚無僧の人物が妖夢にそう言った後、

「じゃあ、今から勝負したらどうかしら〜?」

「ゆ、幽々子様!!?」

食事が終わったのか白玉楼の屋敷から
出て来ていた。

幽々子の姿を見た瞬間、妖夢はその場に傳いて
主人である幽々子の名前を呼んでいた。

「それで良いかしら? 虚無僧笠の方?」

幽々子が虚無僧の人物に問うが返事がなかった。

「あら、貴方、大丈夫…?」

「ツ!!? だ、大丈夫、です!!?」

幽々子が再度聞くと虚無僧の人物は「はっ!!?」
とした表情を浮かべながら返事をする。

「紹介が遅れて申し訳ございません!!?」

我が名は『鬼哭』と申し上げます!!?」

鬼哭がそう言うと幽々子は鬼哭の名前を
聞いた瞬間、ある疑問を持っていた。

『貴方の性は?』

そう、性だ。人、妖、神であろうと性はある筈だ……

彼にもある筈だと思ひ興味があつて鬼哭に質問をする。

「…すみません。性は訳あつて言えません……」

「貴様!!? 幽々子様の前で——「妖夢」」

妖夢が鬼哭にそう言うが幽々子が笑顔で静止された。

「も、申し訳ございませんでした!!? 幽々子様!!?」

「分かってくれたらいいわよ」

幽々子が妖夢にそう言った後、視線を妖夢から鬼哭に視線を向ける。

「色々ごめんなさいね。んで、勝負の件についてだけど貴方は大丈夫かしら?」

「はい、構いません」

「妖夢も良いかしら?」

「はい!!? 問題はありません。幽々子様」

「では、道場に向かいますようか」

幽々子が笑顔でそう言つて道場へと向かった。

「さて、早速、打ち合つてもらいましょうか」

道場に着くと幽々子が二人にそう言った。

「では、我々もじゅんー」待つて頂きたい」

妖夢が木刀を手に取ろうとした瞬間、鬼哭は妖夢に「待った」を掛ける。

「何ですか…?」

妖夢は少し不満そうな表情を鬼哭に向ける。

「木刀などではなく真剣でやりましょう」

「………は?」

「あらあら〜♪」

妖夢は鬼哭の言葉が理解出来なかったのに対して

幽々子は面白いといった表情をして口元を扇子で隠してた。

理解出来なかった。

今、真剣でやり合いましたよと言ったのか？

『木刀』や『竹刀』ではなく『真剣』でだと？

舐めているとしか思えない……ッ!!？

「良いでしょう……その提案に乗りましょう」

「では、自分は『この錫杖』で勝負しまする」

「分かりました……後悔しないでくださいね……」

「分かった」

私をここまでコケにしたことを思い知らせてやります!!？

妖夢が木刀を元の場所に置いて二つの真剣を鞘から抜いて抜刀して鬼哭に向ける。

「ほう、『二刀流』ですか……」

「ええ、この長い剣は『楼観剣』でこちらの短い剣が『白楼剣』と言います」

それに幽々子様が見ている中、無様な姿を晒すわけにはいかない!!？

『妖怪が鍛えしこの『楼観剣』に切れぬものなど、
あんまり無い!』

それに……

貴方の言った言葉が虚言かどうかは――

「取りあえず斬れば分かる筈です」

妖夢がそう言った瞬間、離れていた場所にいた筈の妖夢が目の前にいて楼観剣の刃を鬼哭の首筋に当てようとする。

だが、

ガチイイイイン!!?

「凄いな……これこそまさに『神速』と言うので
しょうね……」

「そう言いますが……随分と平然とした表情をして
楼観剣の受け止めているじゃあないですか……」

妖夢が鬼哭にそう言うのも無理もなかった。

何故なら鬼哭が妖夢の楼観剣の刃を漆黒の錫杖
で軽々と受け止めたからだ。

なら、これならどうですか!!?

妖夢がそう言った瞬間、妖夢の速度が更に上がる。

響く打ち合い。

打ち合う剣と錫杖が火花を散らす。

「誠に見事だ……魂魄妖夢……だが、終わりだ」

ゾクリ!!? と妖夢の背筋に寒気が走る。
嫌な予感がした。

「こちらこそ決めさせてもらいます!!?」

【人符】『現世斬』

妖夢がそうスペルカードを唱えると鬼哭に
向かって突っ込んで数本の斬撃を叩き込むが

「たわいなし……」

何と鬼哭あの数本の斬撃を錫杖一本で軽々と
捌いていく。

「だったら……これならどうだッ!!?」

【人鬼】『未来永劫斬』

妖夢がそう唱えると先程より激しくまさに本当の
神速と呼ぶべき動きに視界がぶれ、速度と更に先程
の倍の斬撃が鬼哭に襲いかかる。

だが、鬼哭は顔色一つ変えずに

「終わりだ、妖夢」

鬼哭はそう言って正面から激しい斬撃を全て大したことない様に軽々とかわしてそして錫杖受け流して空気の裂く僅かな気配に察して、本能で剣を避ける。

「そ、そんな……」

妖夢、お前の敗因は刀などの武器ではなく『ただの錫杖』と思い込み侮ったことだよ。

そして妖夢が戸惑っている中、鬼哭はの背後に回り込み漆黒の錫杖が背中に当てられた。

「そこまでよ」

幽々子がそう言うのと妖夢は少し悔しいといった表情をしていた。

「やはり…私はまだまだ半人前ですね……」

妖夢は半人前である自分自身に溜息を吐いてがっかりしていると

「妖夢。がっかりする必要がないよ……」

「そうよ、妖夢は鬼哭に一撃入れているわよ♪」

「えっ……?」

妖夢は驚きながらも理解出来ないといった表情を浮かべて困惑している

パカリーー

と音がした方へと妖夢が視線を向けると虚無僧笠が縦に真つ二つになっていた。

「き、斬れてたんだ!!?」

良かった!!? 今までの修行は無為意味ではなかったんだと思うと報われた気がした。

『あらあら〜笠の中はそんな可愛い顔をしていたのね〜』

「…えっ?」

幽々子が言う言葉に一時的に思考が停止してしまいそして気が付いたのか顔をペタペタと触る。

髪と目の瞳の色は灰色で肌は雪のように肌白くまさに美形の姿だった

「あ、あまり…見ないでください……」

「そんなに恥ずかしがらなくても良いのに〜」

「幽々子様、あまり鬼哭殿を困らせてはいけませんよ」

鬼哭が恥ずかしそうな表情を見た瞬間幽々子の悪戯心がくすぐられたのか鬼哭を弄る。それを妖夢が幽々子を止めに入る。

「はい…」

幽々子は妖夢に止められたの対してつまらないと言った表情を浮かべていた。

「そろそろお昼なので買っておいといた大福餅を用意させてもらいますからどうか機嫌を直してくださいよ？」

「大福!?? それなら縁側で冥界の桜を見ながらお茶と一緒に食べると美味しい筈よね!!? よろしくね!!? 妖夢!!?」

「はいはい…分かりましたよ。では、いつもの縁側にいてくださいね」

「分かったわ!!? じゃあ、貴方も行きましようか!!?」

「えっ? あ、ちよ、ちよつと!!? 分かりました!!? 分かりましたから引つ張らないでください!!? 大福は逃げませんから!!?」

鬼哭は幽々子に引つ張られて縁側に連れて行かれた。

「何から何まですみません……」

「久しぶりに良いものを見せて貰ったし
遠慮しないで良いわよ。ねえ、妖夢？」

「はい、幽々子様の言う通りですよ。それに
早く食べないと大福餅があつという間に
なくなってしまうですよ？」

「あら、それはどういう意味かしら？」

「私が食い意地が悪いって言いたいのかしら？」

「ひ、ひい!!? お、お許してください!!?」

「幽々子様!!?」

「うふふふふ……どうしようかしら?」

幽々子が妖夢に笑顔で答えるが何故だろうか……
もの凄い圧がある笑顔に言い出す勇氣はなかった
がそれでも妖夢を助ける為に助け舟を出す。

「西行寺殿、聞きたいことがあるのですが……」

「幽々子で良いわよ?」

「いいえ、西行寺殿と呼ばせていただきます」

「そう、残念だわく それで何かしら?」

幽々子が笑顔でそう言うと鬼哭に質問する。

『あの枝だけの木は一体、何ですか?』

そう聞きたい瞬間、幽々子と妖夢の動きがピタリ、と止まって顔色が変わった。

そして覚悟を決めた幽々子は口にする。

「あれは『西行妖』と言って生きてる人間。

人間の精気を吸いとって花を咲かせる妖怪桜よ」

「ゆ、幽々子様!!? 西行妖こと彼に言ってもよかつたのですか!?!?」

「大丈夫よ、彼は他人に言いふらす人物じゃないみたいだから安心して良いわよ?」

「幽々子様……」

心配する妖夢とは反対にクスクスと面白そうに笑っている姿を鬼哭が見ていると

「そうなんですか…見てみたいですね…」

西行妖が満開なる姿を――

鬼哭がそう無意識で言うのと今気付いたのか

「はっ!!?」とした表情して「すみません!!?」と

言う」と

「ふふっ……」

「ゆ、幽々子…様…?」

幽々子は笑いそんな幽々子を見た妖夢は驚いて躊躇うように聞くと幽々子は縁側から立ち上がって西行妖へと一歩また一歩と歩み寄る。

「人間の精気を吸いとって花を咲かせる妖怪桜だっって言っているのにそれでも満開になった西行妖を見たいなんて『親友』ですら絶対に言わないでしょうね……でもね…やっぱり『桜の下に眠る誰か』を私は見てみたいのよ…それに、貴方にも興味があるわ」

「そうでしょうか…?」

「ええ、面白いわよ。普通なら自分の命が一番大事な筈だしそんなこと考えないものなのよ?」

だから、とつても、面白くて興味深いわ

幽々子は鬼哭にそう優しく言った後、

『ねえ、貴方この白玉楼で仕えてみないかしら?』

幽々子は無邪気な子供のよ様な笑顔で笑う

『白玉楼の亡霊少女の姫君』は鬼哭にそう問うた。

妖怪の賢者と西行妖

「本気で言っているんですか…西行寺殿…?」
自分が白玉楼で仕えるなんて考えていなかった…

「あら、私は本気だったんだけど?」

幽々子はうふふ…と言って扇子で口元を隠す。

「お言葉は有り難いのですが…何で自分なの
でしょう? 何処の身分のものか分からない
んですよ? 不安にはならないのですか?」

それに妖夢が納得しないだろうし良くは
思わないだろうと思うから

「そうでもないわよ? 貴方、可愛い顔している
しそれに妖夢も気に入っているみたいだし」

「ゆ、幽々子様!!?」

幽々子が鬼哭にそう言うのと妖夢は顔色は
真っ赤になって慌てめふためいていた。

「でも、嫌いじゃないのでしょうか?」

「そ、それは…!?」

幽々子の言葉に戸惑いながらも

「た、確かに…嫌いではないです……」

モジモジとはした姿を見て鬼哭はそんな妖夢の姿を可愛いと思った。

「それに妖夢から聞いたけど貴方、妖忌に

用があつたみたいね…一体、何の用かしら？」

幽々子は鬼哭を真意を測ろうと妖忌の名前を出すと鬼哭は少し困った表情をしていた。

「この場所では出来る内容ではないので

西行寺殿、二人きりで話が出来る場所を儲けてもらえませんか？」

「……わかったわ」

幽々子はそう言った後、西行妖から離れて鬼哭と妖夢がいる縁側へと戻って来た。

「妖夢」

「はい、幽々子様」

「彼と話してくるから後のことは任せても

良いかしら？」

幽々子の表情は先程の無邪気な笑顔ではなく真面目で真剣な表情をしていた。

「分かりました」

妖夢がそう言うのと幽々子は笑顔に戻っていて
「じゃあ、お願いね」と言つて鬼哭と一緒に
隣の襖の部屋に入ろうとしてると

「あ、そうだ!!?」

「どうしたんですか? 幽々子様?」

幽々子様が何かを思い出した様に視線を妖夢に
向けながら笑顔で

『今日は久しぶりに『親友』が来ると思うけど
伝えてもらえないかしら?今回は急用が出来た
から会えなくなつたつてね』

「えっ!!? そ、そんな!!? 幽々子様!!? ご自分で
お伝えすれば良いではありませんか!!?」

妖夢が慌てていると幽々子は笑顔で

『『食い意地が張っている』つて言ったでしょう
だからそのお仕返しよ』

「どうやら先程の言葉を気にしていたようだ…
やはり『食べ物に関する恨みは怖い』と鬼哭の
中でそう思うのだった。」

「そ、そんな……」

妖夢はその言葉を聞いた瞬間、妖夢はかなり絶望した表情を浮かべて肩をがっくしと項垂れていた。

その後、とふふふつ、と笑いながら妖夢を背にしてその場を後にした。

『紫様!!? 起きてください!!? 紫様!!?』

金髪で九本の尻尾の女性が今寝ている紫と言った金髪の女性を起こしに行っていた。

「う〜くん……うるさいわね…藍は……」

「今日は幽々子様と会う約束をしていたんじゃないんですか?」

藍と呼ばれた女性そう言う。「あ?あ〜……そういえばそうだったわね……」と言っ
て起きる。

「しっかりとして下さい紫様!!? 橙に悪影響に

なる姿を見せないでください!!?」

「藍、アンタは橙のことになるといつもこれよ!!?」
もう少し子離れしなさいよ!!?。この親バカ狐!!?」

「なっ!!?。いつも寝てばかりの紫様に私のことを
あーだこーだのとやかか言われたくありません!!?」
とにかく早く着替えて来てください!!?」

「貴方は私のお母さんか何かしら…全く…」

紫は藍にそう言った後、着替えに行った。

「なるほど…先程の打ち合いで自分をひどく
お気に召したと言いたいですね?」

「ええ、更に…」

『貴方、妖夢相手に手を抜いたでしょう?』

「ツ!!?。何でそう思うんですか?」

鬼哭が幽々子の言葉に戸惑いながらも恐る恐る

聞くと

「気付いたのは妖夢が貴方に二回目の技を唱えた時に違和感があったのよ」

二回目…つまりは、妖夢が更に斬撃を増やした時のことか……

『だったら…これならどうだツ!!?』

【人鬼】 『未来永劫斬』

その時に目の前にいる西行寺殿は自分と妖夢が打ち合いをしているあの激しい斬撃の中、一瞬にして自分の力を理解したのだ。

「貴方が妖夢の力に合わせて妖夢の剣の斬撃を軽々と捌いて見せた……『私の目の前で』」

西行寺殿は真剣な表情をして自分にそう言う

「それに、貴方のさっきの願いも叶うかも
しれないわよ?」

それを聞いた瞬間、ピタリ、と止まってしまふ。

『満開の西行妖』を見ることができるとて
言いたいんですか?」

「そうよ」

「不可能だ……」

鬼哭が幽々子にそう言う普通に考えれば不可能だ。何故なら西行妖を満開するということは全ての人の精気を吸い出してしまうからだ。『人間達』や『妖怪達』が黙っている筈がないからだ。

「実はね……『親友』が『異変』を起こして
みないか？　って言われたの」

なるほど……異変としてか……

「だからその異変の時に西行妖を満開しようと
思うのよ」

『だが、その『親友』が西行妖を満開にする
のを黙っていないと思うのですが？

「分かっている。だから誰であろうとも絶対に
満開にしてみせる」

西行寺殿の瞳を見る唱える決意したような瞳を
していた。

「ふっ、そうですね……それが本当なら貴方に
仕えなければ満開になった西行妖を見れそうに
なさそうですね……」

「それじゃあ!!？」

鬼哭の言葉を聞いた幽々子は無邪気な笑顔で
そう言うのと鬼哭は幽々子の前で傳いて

『西行寺殿、我が忠誠をお受け取り下さい。
そして名を明かせぬこの愚か者をどうか
お許しください』

幽々子に忠誠を誓う。この身が朽ちようとも…
それにこの身が■になろうとも守って見せよう。

「そんな畏まらなくなつて良いのよ？
それに貴方がいてくれて私も嬉しいし妖夢も
嬉しいと思う筈だから」

「そ、そう言ってもらえると嬉しいです……」

「あらあら…そんなに嬉しかったのかしら？」

幽々子がそう言うと「あまり茶化すのはやめて
ください幽々子様…」と言って俯いてしまった。
どうやら褒められ慣れていなかったようだ。

「んで、妖忌に用があつたのは『西行妖』だけ
だったわけじゃないのでしょ？」

流石は西行寺殿だ…なんでもお見通しつて
わけですか……

「実は『能力』について相談しようと思って
いまして此处に来ました」

「能力について？」

「そうです。この能力をどうしたらいいかを
ご教示していただきたく此処に来ました」

なるほど…それほどまでの能力と言う訳ね……

「その能力、見せてくれないかしら？」

「で、ですが……」

「大丈夫だから、見せてくれないかしら？」

幽々子が鬼哭にそう優しく言って鬼哭の手に
添えるその姿はまるで母親のような温もりを
感じた。そして鬼哭は覚悟決めたのか

「分かりました…自分の能力を見せます……」

「ありがとう」

幽々子は鬼哭に感謝した。

本当は見せたくなかったのだろう…それを見せて
くれるのだから本当に感謝しかない

その後、鬼哭は『漆黒の錫杖』手に取って
立ち上がった。

『深淵逆巻けー墨染■■■』

鬼哭はそう言って幽々子の前でそう呟いた。

「ふあゝ…相変わらず白玉楼は平和ね…」

「紫様、シヤキツとして下さい、

もうすぐ着きますよ」

「分かったわよ…全く……」

全く…相変わらず、うるさくて敵わないわよ……

紫と藍が白玉楼の石段を登っていると目の前には
白玉楼の門がありある人物の姿があつた。

「紫様、藍さんお久しぶりです!!？」

「久しぶりだな、妖夢」

藍さんが笑顔そう言うのと紫様が私に

「幽々子はいるかしら?」

と笑顔で聞いてくる。

私は今から『最愛の主人の親友にお帰り願わねば
ならないという大仕事があるのだから……』

「ゆ、幽々子様は急用にてまた後日改めてほしい
と言われました」

私がそう紫様達にそう言うと

「急用？ そんなに忙しいことかしら？」

「みたいです」

嘘は付いてはいけない筈だ。

人と会っているんだから用事じゃない筈がない…

「どうしますか？ 紫様？」

藍さんは納得して紫様相談しているが

「……………」

「紫様…？」

「ゆ、紫様…？」

紫様は何故か深く考え込んでしまい藍さんは
心配していた

「妖夢」

「は、はい!!？」

いきなり紫様が私に声を掛けてきたので
驚いてしまった。

「本当に外せない急用だったのかしら？」

「は、はい!!? 幽々子様はそう言っていました!!?」

私が紫様にそう言うと紫様がまた考え込んで
しまい始めてしまった。

「そう、そう言うことならまた日を改めて来る
わね、妖夢」

「またな、妖夢!!?」

「はい!!? 紫様!!? 藍様!!?」

そう、二人が帰ると思いい胸を撫で下ろした時、

ゾクリ!!?!!?

背中に寒気がした。今までに感じたことがない
『寒気』と『悪寒』に襲われた。

(な、なんだ…この身が震えてしまいそうな
この寒気と悪寒は普通じゃああり得ない…
まさかー)

「妖夢」

「は、はい!!?」

「これは一体、どう言うことかしら?」

紫様が笑顔で聞いてくる。笑顔の筈なのに
こんなにも怖く恐怖を感じるのでしょうか…

「紫様!!? そんなことより早く急ぎましよう!!?・
もしかしたら幽々子様何かあったかもしれない
可能性があります!!?」

「確かに藍の言う通りね…行くわよ!!? 藍!!?」

「す、すみません…幽々子様…ツ」

妖夢めには荷が重い大役でした…

妖夢はがつくしとその場に膝から地に
ついていた。

「紫様、先程の寒気は一体…」

「さあね、でも、これだけは分かるわー」

『幽々子は何かを隠している』

「隠す、ですか…」

「ええ、私達に日を改めるように言った時は
本当に急用が出来たのだと思ったのよ…でも…」

「今の異常なまでの気配…ですか…」

「そうよ……このままだと幻想郷のパワーバランスが崩れる可能性があるかもしれないわ……」

紫の話聞いた藍は額に汗を流しながらもゴクリ、と唾液を飲み込む。そして二人がそう言っている間に幽々子達がいる襖の前に来ていた。

「幽々子!!?入るわよ!!?」

紫がそう叫んでガタン!!?と勢いよく襖を開ける。すると、

「あら、紫くどうしたのかしら?」

目を改めてほしいと妖夢に伝えた筈のだけど?」

『幽々子だけしか居なかった』

「幽々子……」

幽々子は相変わらずいつも通りの笑顔で私達に向けていた。

「紫、異変のことで何かあったの?」

何処を見ても見当たらない。
違和感もない。
姿形すらない。

「幽々子…最近、何があったかしら？」

「いいえ、何もなかったわよ？」

「……………」

「本当にどうしたの？ 怖い顔してるわよ？」

幽々子が私の心配してくれているけど頭に
入らなかった。

「じ、実は…先程、妙な気配がしたから無礼
だと分かっていたんですけど…強引に入って
しまつて……………」

藍が今迄の内容を幽々子に説明する。

「そうだったのね〜でも、何もなかったし
大丈夫だったわよ？」

「ツ!!？」

「そうだったのですか…では、異変について
ですが…『例の吸血鬼』が起こした異変は
『博麗の巫女』によって無事に解決したので
以前からお話していた次の異変の件は幽々子様
にお願いします」

藍が内容を説明している中、紫は俯いて幽々子を
見ようとはしなかった。

「分かったわくわくわがざ伝えに来てくれて
ありがとうね」

「いえいえ、こちらこそ勝手に上がり込んで
すみません…幽々子…」

藍が謝ると幽々子は立ち上がって視線を
紫達に向けて

「今からお茶にしようと思うんだけど一緒に
飲むかしら？」

「お茶ですか…でー」「残念だけど…この後、
結界の管理があるからまた今度にするわ」

俯いていた紫が顔を上げてスキマを開けて
藍と一緒にいる。

「幽々子…」

「何かしら…？ 紫」

『私達、親友よね？』

紫は幽々子に問う。

1000年間長い付き合いであり親友だからだ。
だからこそ親友を信じた。

「親友に決まっているじゃない」

「そう、よね…」

紫はそう言っ

「じゃあ、『例の異変の件』お願いね……」

紫は幽々子にそう言っ

て幽々子を見ることがなくスキマを閉じた。

「ふう〜…帰ったわね……」

「良かったんですか？」

「あら、心配してくれているの？」

――鬼哭

「当たり前じゃないですか……僕が無理な
お願いをしたせいで!!？」

「貴方が言ったんじゃない」

『能力のことを誰にも言わないでください……』

「で、でも……!!？」

鬼哭は自分が言ってしまった言葉のせいで
西行寺殿の立場が悪くなってしまうのではと
考えていると

「大丈夫だから安心しなさい…それに」

と幽々子は立ち上がって笑顔で

「やつと、『西行妖を満開にすることが
出来るのよ?』」

そう言うが鬼哭はやはり元気がなく気にしていた。

「ねえ、鬼哭?」

「…何でしょうか、西行寺殿…」

相変わらずお堅いわね…妖夢以上の石頭
じゃないかしら…?

そう幽々子が言うとう鬼哭をギュツと抱きしめた。

『もし、西行妖が満開になったら西行妖の下で
お花見をしましょう? 妖夢と『下に眠る彼女』
も加えてきつと楽しいわよ?』

「そう、ですね…」

鬼哭はそう複雑そうな表情ながらも
恥ずかしそうな笑顔を浮かべていた。

「結局、私達の勘違いでしたね…」

紫様ー

藍はスキマの中で紫に言うが紫はまだ納得していないようだった。

「……藍」

「なんででしょうか？ 紫様」

藍が紫に返事した後、

『幽々子を監視しなさい』

と紫は藍に今迄聞いた事がないぐらいの冷たい声で『妖怪の賢者』らしい『無慈悲な命令』を下す。

禁忌の能力と深淵の能力

幽々子様!!? 鬼哭!!? 大丈夫ですか!?!?」

「大丈夫よく妖夢く」

幽々子は妖夢そう言うが妖夢は真っ直ぐな瞳で幽々子を見ていた。

「私がもう少し紫様達への配慮が足りなかった私の責任です……」

妖夢が先程の件、『紫の件』によることを気にして幽々子に傳っていた。

「妖夢のせいじゃないわ、私が『彼女の能力を教えてほしい』って言ったことが原因だから妖夢のせいじゃないわ」

「で、ですが…ッ!!?」

「それに、いずれは紫や藍に気付かれることだったわよ? それにもし、私が紫の立場なら『私達を監視』すると思うわ…紫なら幻想郷の為ならどんなことでもするわ…」

幽々子が真剣な表情で妖夢にそう言う。

全部…全部……僕のせい……

鬼哭がそう思いその場の空気に耐えきれずその場を

離れようとする

「何処へ行くこうとかしらっ？」

幽々子が鬼哭の手をがっしりと掴む。

『まさか、今回の責任を取ってこの白玉楼を出て行くこうって考えていないわよね？』

「ッ!!？ それは……」

やっぱり……この子は――

『この子は優し過ぎる……』

自分のことより『私や妖夢の為なら何だってする』だろうと思うわ……

それに、もし、此処で手を離したら……

『間違いなく死ぬ気がする』

だったら……

「もし、申し訳なく思っているなら私達に力を貸してほしい……」

幽々子は両手で鬼哭の両手を優しく握る。

「そうですね!!？ 鬼哭さんのあの錫杖で捌きるあの技術や力が必要なんです!!？」

「……本当に良いんですか…?」

僕が西行寺殿や妖夢の隣にいても良いのだろうか?

「大丈夫よ、むしろ居てくれないと私達がとても困るわくねえ、妖夢?」

「そ、そうですよ!!? 色々大変ですよ!!? 先程言ったように幽々子の食い意地の悪いから沢山お料理を作らないといけないといけないことが多いから本当に——」
「よくうむ?」

「ひい!!?」

妖夢が話しをしていると背後から笑顔の西行寺殿がいたがその笑顔がとても怖く見えた。

しかも、妖夢の肩を幽々子がガシツと掴みギュツ!!?と握り締めている。

「ゆ、幽々子様!!? も、申し訳なくありません!!? お許しください!!?」

妖夢は西行寺殿に必死に許しを懇願しているが

「どうしようかしら…?」

西行寺殿は相変わらず笑顔でいる。

「街里で『彼女』と一緒にある三色団子を

五十本買って来てくれたら許しあげるわよ?」

西行寺殿が扇子で口元を隠しながら笑顔で妖夢にそう言う

「そ、そんな……」

妖夢はがつくしと肩を落としながら懐に入れていた財布を取り出して金額を確認していた。

「よ、妖夢!!? 街里に行けば情報収集で何か分かるかもしれないよ!!?」

「そうですね……って言うか……鬼哭さんって『女性』だったんですか!!?」

「あらら、気が付かなかったの?」

最初に『自分』って言っていたけど今は『僕』になっっているから分かりにくいけど彼女は立派な女性よ? 妖夢、貴方、いくらなんでも失礼よ?」

「うっ!!? うぐっ……ッ!!?」

た、確かにそうだ……性別を間違えるなんて失礼過ぎるし鬼哭さんを不愉快な思いをさせたはずだ……此処は潔く……

「責任を取ります!!?」

妖夢がそう言って正座をし始めた。

「えっ？　え？　ちよつと…？」

鬼哭は意味が分からないと言った表情を
していた。

「何で『切腹』しようとしてるんだよ!!？」

切腹なんて馬鹿げた所業をしようとする
この半人半霊（愚か者）をなんとしても
止めなければならぬのに!!？」

「西行寺殿!!？　手伝ってください!!？」

「あらあら、大変なことになっているわね？」

この腹黒亡霊姫様めえええええええ!!？」

この時、僕は後ろで楽しそうに見ている
我が主人に言葉にならない声で叫んでいた。

「霊夢さーん!!？　霊夢さーん!!？　いますか？」

「何よ…うるさいわね…一体、何の用よ？
取材や新聞ならお断りよ」

――文

「あやや…お忙しいところすみません。
後、今回は取材ではなく『気になることが
ありまして…』」

「気になること？ アンタまだ、あの日に
言ったこと言っているの…文？」

『あの日、あのこと…？』

文は理解出来なかった。今回、話そうとする内容
は初めてで更には博麗神社に来るのは久しぶりの
はずなのに何故、霊夢は最近のことのように言う
のでしょうか？

「なによ、忘れたの？」

「ええ、どうやらそうみたいでして…」

文が霊夢にそう言うと「ふーん…」と言った
後、霊夢は台所に行ってお茶の準備をする。

「まあ、話ぐらいなら聞いてあげるわよ」

霊夢はそう言って縁側に座ってお茶をずずと
音を立てて啜りながら

「まあ、どうせ『例の虚無僧』についての内容』
についての情報でしょう?」

「えっ…?」

「ちよ、ちよつと…どうしたのよ? 文?」

ちよつとまで…つとということとは…私は何日も
何日も霊夢さんに『虚無僧』のことを話して
いたのですか…?

文は霊夢の言葉に理解出来ないでいながら
思考が停止していた。

「ふむ、なるほどな……」

鬼哭は先程、街里で拾ったであろう文の新聞を
歩きながら読んでいた。

内容はこうだった。

幻想郷を支配しようとした『紅魔館』の『吸血鬼』
達が『楽園の素敵巫女』である『博麗霊夢』と
『普通の魔法使い』である『霧雨魔理沙』に

よって見事に解決した!!?

と大々的に大きな文字で書いてあった。

「吸血鬼…か…」

虚無僧笠を被った人物は新聞の内容を見て
無意識にそう呟いた後、

「妖夢は新聞に書いてあるこの博麗の巫女と
霧雨魔理沙はどう思う?」

「……………」

「多分、異変を起こすなら多分、博麗の巫女と
この霧雨魔理沙って言う奴らが来ると思うが
どう思う?」

「……………」

「ああ!!? もう!!? 根に持ちすぎですよ!!?
妖夢!!?」

鬼哭は呆れていた。何故なら妖夢は先程の
切腹のやり取りをまだ引きずっていたからだ。

「で、ですが…恥晒してしまった私が鬼哭さん
に償えるとしたらこれしか…」

これはまさに重症だ……つてかそもそも

「異変の時に汚名を注ぐで良いのでは？」

「あ、そ、そういえばそうですね…」

妖夢が顔を真っ赤にして言った瞬間、

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！？

「ん？　なんだ、この爆発音は？」

「あつちからです！！？」

鬼哭と妖夢が音がした方を見ると

「ほお〜……………」

無意識に声が出てしまっていた。

何故なら

「綺麗な『湖』と『立派な屋敷』だな……………」

目の前にある『血のような真っ赤な屋敷』を見て正直に凄いと思う。一体、どんな人物が住んでいるのだろうかと思ってしまう。

「眺めてる場合じゃあないのでは!!？」

おっと、ゆっくりと観察している場合じゃなかった…

恐る恐ると屋敷の中に入ると

大量の血溜まりと更にはこの屋敷の住人達であらうと思われる人物達が倒れていた。

「大丈夫ですか？」

鬼哭と妖夢はとりあえず目の前で倒れている幼い少女に冷静に声を掛けていた。

見た目はボロボロだが帽子に倣ったピンク色の衣装に太い赤い線が入り、レースがついた襟。三角形に並んだ三つの赤い点がある。両袖は短くふつくらと膨らんでおり、袖口には赤いリボンを蝶々で結んであり更には左腕には赤線が通ったレースを巻いてあってまさにお嬢様だった。

「あ、貴方達は…？」

目を覚ました。どうやら死んでいないみたいだ。

身長は10代前半の少女がいた。
先程のピンクの服に水色の髪といった少女とは
違い、全体的に赤が強調されている。

「名前を聞くなりまは君からじゃー」

「あれ？オカしいなア…？」

背後から声がしたのでゆっくり振り返ると

「まだ、こわれてナカったんだネ？

ネエ、レミアアオネえサマ？」

深紅の瞳に濃い黄色の髪をサイドテールに
しており背中には綺麗な宝石が付いた歪な羽が
付いていた。

「フランツ!!？」

「どうやら水色の髪の少女の名前は『レミアア』
という名前で金髪の少女は『フラン』という
らしい。」

「ソレにアタらしいオモチャ達をツレテキテ

くれたノネ!!？ フラン、トテもウレシイわ!!？
サスガはやさシイオネえさま!!？」

だが、見て分かる通りがフランという少女は…

「フラン!!？ もうやめて!!？ 『狂気』になんて

「負けないでツ!!?」

レミリアはフランにそう叫ぶがフランはふふつとクスクスと笑う

「何ヲいッているノオネエさま? ワタシがフランダヨ?」

「黙れ!!? フランの顔でフランの声でフランを語るな!!?」

レミリアの言う通りフランは自分自身の『狂気』飲み込まれていたのだ。

「モウ、うるサイなあ…セツかつくあたらしイオモチャがキタんだからウゴケないんだツたらダメツててよ。オネエさま」

フランがレミリアにそう言う表情はレミリアにはもう見向きもせず『もう壊れたオモチャ』にはもう興味がないといった表情だった。

「妖夢下がついて…」

「そんな!!? 二人でやった方がー」 「妖夢」

妖夢が鬼哭に共闘提案するが鬼哭は一瞬にして否定する。

「どうしてですか!!? 私が半人前だから『ダン!!?』」

妖夢が鬼哭に叫ぶと鬼哭は漆黒の錫杖を地面に叩きつける。

「半人前だからじゃない……」

「だったら……」

妖夢には分からなかった。

だが、次の瞬間、理解する。

『お前を巻き込まないで戦う自信がないからだ……』

「ツ!!?」

な、なにこれ……ま、まるで……

「サテ、あなたはだレ?」

フランが狂気の笑みを浮かべながらそう聞くと

『鬼哭……』

「キコク……? ヘンなナマえだね?」

マあ、イヤ、セイぜいタノしませてネ?」

フランはニヤリと狂気じみた笑みを鬼哭に向けてそう言う

「フランちゃんだっけ? じゃあ、ゲームを

「しょうか？」

「ゲーム？」

フランは予想していなかったのか驚いた表情をしていた。

「ちよ、ちよつと!!？ やめなさい!!？」

「オネエサマ!!？ スコし黙っていて!!？」

レミリアが止めに入るがフランが止める。

ゲーム？ ツまりは遊ぶつてコとヨね…？

「それにもし、フランちゃんが僕に勝ったら『どんなことでもしてあげます』」

ソレってつまり……

ドンナコトヲシテモイイツテツテコトダヨネ？

そう、コンテニューがデキないグラいに……

フランは口元をニヤリとさせながら悪魔の様な笑みを浮かべて頬を赤く染める。

「イイの？ 貴方をグチャグチャに破壊

しちヤウヨ?」

「良いよ。ただし、僕が勝つたらもちろん何でも良いよね?」

コノ子はナンでこんなにも勝てると思うんだろう?
吸血鬼ニ勝てるハズはナインだから…

フランは思考を巡らせるが幾ら考えようと
やっぱり分からない

「イイヨ♪ ノってアゲる!!?」

コンテニュー出来ないグライぐちやグチャにして
壊（破壊）シてアゲるからツ!!?」

フランはそう言って鬼哭と言った人物に勢いを
付けて向かって行った。

「妖夢、よく見ておけ……これが僕の方だツ!!?」

『深淵逆巻けー 『墨染一文字』 ツ!!?』

鬼哭がそう言った瞬間、漆黒の錫杖が墨の様な
液体になってボコボコと泡立ち錫杖だった物が
形が崩れていき『筆の形』に変形してまさに

『幽玄』と例えるに相応しい『漆黒の筆』に
なった。

春雪異変編

墨染の■■■者

「■■■のお前に■■■のは分からない…ツ!!?」

血塗れで大量の■■■の真っ赤な世界で一人の老人が一人の人物に必死になって訴えていた。

自分にはこの人の形をした悪鬼が何を言っているのか分からなかった……

『■■■の娘』も阿保で間抜けな虚け女だ!!?

「こんなー」「黙れ」

老人はそう言うとその人物は老人の心臓を躊躇いや容赦なく手に持っていた朱に染まった刃突き立てて刺した。

「ぐっ!!?」「ゴフ…ツ!!?」

老人は刺されたせいか口元から一筋の血が流れていく。

「こんな■■■を引き入れたのだからな……」

そう老人は言っただけで何重にも闇が混ざり合っただけで悲しそうな憎しみの瞳をを此方に向けていた。

「はアア…ハアあ…」

なんデ……ナンで……

フランは息を荒げて睨みつける。

「ナンでたオレないノヨツ!!?」

「信じられない…ツ!!?」

レミリアは驚いていた。狂気のフランにまるで赤子のようにもて遊ぶように軽々と避ける。

目の前にいる『人間は本当に人間なのだろうか』と疑ってしまう。

「す、凄い…」

妖夢も驚いていた。

鬼哭の動きに一切の無駄がない。

それどころか……

「どうしたの、フランちゃん？ 僕をぐちゃぐちゃにして壊すんでしょ？」

目ノマエのオモチャがワタしにそう言っテくる…

アあアア!!？ もウ!!？ メンどくサイ!!？

狂気に染まっているフランはイライラした表情をしながら鬼哭を睨みつけた。

【禁忌】『レーヴァテイン』

フランがそう言うのと業火の渦が激しく渦巻いて火花が花卉のように舞い散って炎の魔剣（魔杖）が姿現してを顕現させて世界を焼き払うぐらいの凄い熱量を感じた。

「コレで終ワリだよ!!？」

フランがそう言っテレーヴァテインを鬼哭へと振り翳す。

だが、

「ッ!!？」

鬼哭は軽々とギリギリでレーヴァテインを避けていく

「チヨニコマカ逃げナイだよ!!？」

フランはそう言ってレーヴァティンを振るうが一向に当たる気配がない。それどころか一文字と打ち合っている。

コウなつたら奥のテを!!?

【禁忌】『フォーオブアカインド』

フランが四人に分身して一人だけレーヴァティンを持っているフランがいた。

「コレで終わりだよ!!?」

四人のフランがそう言って鬼哭にもものすごい勢いで迫ってくる。

「数を増やせば勝てると思っていたのか?」

鬼哭はそう言って『墨染 一文字』をクルクルと綺麗な円を作りながら

「ぐっ!!?」

「アガっ!!?」

「ゴッフ!!?」

一人目のフランは首に叩きつけて二人目のフランは右肩に蹴りを入れて三人目のフランは踵落とし食らわせる。

「ソ、そンナ!?？」

「くらえ」

最後の四人目のレーヴァテインを持ったフランは
一文字で墨と一緒に溝打ちで食らわせる。

「ガハっ!!?？」

「フラン!!?？」

レミリアはフランの名前を叫ぶが鬼哭はそんな
レミリアにはお構いなく目の前で蹲るフランの
首を掴み上げる。

「お願い!!?？ フランを…フランを放して!!?？」

「お、オネエ、サマ…ツ!!?？」

フランは掠れた声でレミリアの名前を呼ぶ。

「さて、僕の勝ちだね…」

そう、勝った方が好きにして良いつて約束
だったよね？

「鬼哭!!?？ やめてください!!?？」

妖夢は叫ぶ。「もう勝負は終わったじゃあ
ないですか!??？ これ以上は無為意味です!!?？」
と訴える。

「コウなツたら…ツ!!?」

フランは右手をこちらに向けている。

「まさか…ツ!!?」

レミリアは何かを理解したのか

「やめなさい!!? フラン!!?」

オネえさまがナニかを叫んでいるケドワタシ
知ツタコトじゃない!!?

「キュツとしてどかーン!!?」

とフランは言つてレミリアは目を閉じる。

アハ、あはハハははハハハハハは!!?

勝ツタ!!? 勝つた!!? このゲーむは私の勝ち!!?
ぐちやグチャに握り潰シテシヤツた!!?

フランが勝つた愉悦に浸つてレミリアは
諦めた表情をしていると、

誰がぐちやぐちやにだつて…?

「エっ…?」

「う、嘘…ッ!!?」

レミリアとフランは驚いていた。

その驚きようはまるで『予想していた結末とはまるで違う』ような表情をしていた。

「う、ウソダ……」

「ど、どうして…フランの能力である

【ありとあらゆるものを破壊する程度の能力】
が発動しなかったの…?」

レミリアは理解出来ないと言った表情をして
フランは絶望した表情を浮かべていた。

なんていう顔をしているんだ。フランと言った
少女の顔が怯えた表情をしている。どっちが人間
でどっちが妖か分からないじゃないか…

「約束の内容は……」

「鬼哭!!? もう勝負は着きました!!?」

無縁な殺生は避けるべきです!!?」

「……………」

妖夢が鬼哭に叫びながらそう言うが鬼哭は
そんな妖夢の言葉を無視してフランに向ける。

そしてー

『君だよ、フラン』

鬼哭はフランにそう言つて墨染一文字を使い
目の前にいるフランという少女漆黒の墨に
染められ『塗り潰された』

「なんで……」

「ん？ どうしたのかな？ 妖夢？」

「なんであの子を殺したんですか!?!?」

妖夢は鬼哭の胸ぐらを掴みかかっている。

そんな中、鬼哭は表情はまるで能面のように
平然と

『必要なことだったんだよ』

と言った。

必要なこと……？ フランを殺すことが正しくて『正義』だとも言うのか？

「嗚呼、血が熱い、まだ月も出ていないのにこの女を殺せと、本能が騒いでいる」

鬼哭の背後からレミリアの怒りの声が聞こえた。

そして――

「なんのつもりだ……」

鬼哭がレミリアにそう答えると背後には

【神槍】『スピア・ザ・グングニル』を構えて

鬼哭の首筋に当てていた。

「フランを殺した貴方を殺して私も死ぬわ……」

レミリアが鬼哭にそう言うと

「そうか……」

鬼哭はレミリアにそう一言言った瞬間、

「君、感情に身を任せすぎでしょ？」

「なにを――」

レミリアが何かを言おうとした瞬間、

ガキイイイイン!!?

「えっ…？ 嘘…？」

鬼哭が黒染一文字でスピア・ザ・グングニルを
弾き飛ばした。

そしてー

「染まれ…」

鬼哭がそう言ってレミリアを黒一色に染めた
瞬間、フランと同じようにレミリアが意識を
失った。

全く……

『このレミリアって子も妖夢も何で殺したって
いう考えになるのか分からないよ？』

「えっ？ 殺してないんですか!?!？」

「当たり前でしょ？ 『筆で人は殺せないよ？』

妖夢、勘違いし過ぎでしょう？」

嘘だ。使い方を間違えてしまったら間違はなく
誰でも殺せる…これはそんな『殺人筆』だ。

「うっ…すみません…」

じゃあ、何やったんですか？」

「話しても良いけど早くこの紅魔館…だっけ？」

此処を出よう。でないといけないと他の人達が目を覚まして
しまいそうだから」

「そ、そうですね!!？」

幽々子様にも団子を届け

なければ…ツ!!？」

妖夢がそう言った後、「はいはい…」と言って
視線のある場所に向けながら紅魔館を出て行った。

「馬鹿な…こんな馬鹿げた結果があつて

たまるものか……」

とある人物が先程の戦闘を観戦していたのか
信じられないと言った表情を浮かべた。

相手は吸血鬼だ…天狗や鬼に対抗出来る種族
だぞ!?？」

「やはり、紫様の言う通りだ……」

『あの鬼哭と言う奴が幽々子様と妖夢を誑かす

幻想郷に害する害虫だ!!？」』

しかし、まだだ：『奴の能力』が分かってない：後、能力さえ分かれば紫様に報告ができる!!？

「…偵察を続けるか？」

いや!!？ 何を迷う必要があるか!!？ むしろ、
続けるべきだ!!？ 全ては紫様の為!!？
そして幻想郷の為に!!？

そう言ってその人物は紅魔館で開いた裏口の扉を見ながらそう覚悟を決めた。

「んで、あれは何だったんですか？」

紅魔館から街里へと移動妖夢と鬼哭は戻って来るとすでに夜になっていた。

「あれって？ えーと…何だっけ？」

『あの筆についてです!!？』

「あはは…冗談だよ、冗談」

あはは…と鬼哭は笑って冗談を言う。

「そうだ…妖夢、言い忘れていたんだけど…桜餅を買ってきてほしいんだけど…大丈夫？」

「はあ、分かりましたよ…桜餅、買ってきます。それで良いですか？」

「いやゝすまないねえ、妖夢君!!？」

「はいはい…口が達者ですね…」

「買ったら説明してもらいますからね？」

「了解」

妖夢がそう言うとその場所を離れて行った。

さてと、これ以上は隠せないようだな…

「説明してあげるからいい加減に出てきな…」

——八雲藍

鬼哭がそう言うのと背後の八百屋から現れた。

「……いつから気付いていた？」

藍は視線を鬼哭から一切離さずそして警戒も

解かずに恐る恐ると聞いてくる。

「紅魔館っていう館からつけてきた当たりかな？」

鬼哭は藍にそう言って戯ける様に笑う。

やはり、こいつは危険だ…ツ!!？

幻想郷にとつても…そしてー

【式神】『狐狗狸さんの契約』

紫様の為にもーーツ!!？

藍がそうスペルカード唱えると円状に囲った
レーザーがまるで滑ってくるようにこつちに
向かってきた。

「おっと、危ないじゃないか!!？」

わざとらしい…全て見抜いていたくせに…

「貴様、何を企んでいる!!？」

「別に、それにあんた言う理由があるのか？

ないだろう？ それにあんたには関係ないし
役者不足だよ？」

鬼哭は藍にそう言った後、その場を後にしようと
すると

『忍霧ー』

「ツ!!?」

この名前を聞いた瞬間、コイツの表情は変わった…つまり、知られたくないことだということだな……

「その名前を知ったなら話しは別だ…」

鬼哭はそう言つて『墨染一文字』を顕現させて藍に向けていた。

「何で『その名前』を知っているのかは知らないけど…全部教えてもらうよ?」

『墨染ノ時雨』

鬼哭がそう唱えると筆先から大きな黒一色の丸い球体が出てきて宙に浮いていきそして雨のように漆黒の墨染の雨が藍に目掛けて降る。

なんだ、これは? 墨の雨…? 人体にも害はない…あれだけ言つて置いてとんだ見掛け倒しだな……

藍がそう思い更に攻撃をしようとしていると

あれ…？ 私は何をしていたんだっけ…？？
目の前の奴を捉えるのは覚えているが…

藍が混乱していると

「僕の能力だよ……」

「の、能力…だと…ツ!!？」

藍が驚いた表情を浮かべているが鬼哭は
冷たい視線を藍に向けていた。

「僕の持っている能力は

『「事象を塗り潰して書き換える程度の能力」』
っていう能力だよ…これで満足？」

『「事象の書き換え」だと…ツ!!？」

あ、ありえん…ま、まさか!!？」

「墨…か…？」

「そうだよ、墨で対象者を塗り潰してそこに
新しく書き換えるんだよ」

この墨染一文字でねー

ぐっ!!？ これでは…まずい…瞼が…重い…

「大丈夫、『貴方は全て忘れるぐらい飲み過ぎる』

「って書き換えたから大丈夫だよ？」

「な、何が…大丈夫な、ものか…：紫様の言う通り
パワーバランスが崩れて、しまうではないか!!？」

『レミリアには今日一日の記憶』を書き換えて
フランちゃんには『狂気』を書き換えてその狂気
を貰ったんだよ」

その話しを聞いた藍は「ふざけるな!!？」と
鬼哭に向かって叫んでやりたかった。

「どうせさつきの名前も八雲紫が調べたんでしょ？
陰でこそこそするまさに、卑怯者だ」

「お前、こそ、紫様の何を知っていると
言うんだ!!？」

「知りたくありませんよ…『人の大切なものを簡単
に奪っていく卑怯者』の気持ちなんて分かりたくも
ない!!？」

「ッ!!？」

この時、藍は鬼哭に恐怖心を覚えた。

何故なら鬼哭の瞳が光すら写さずぐるぐると
渦巻いていたからだ。

一体、紫様の何が彼奴をそうさせるのだ…？

「さて、八雲藍…そろそろおやすみの時間だ。
まあ、安心してよ。気付いた時には忘れている
と思うから…それに、忘れるから教えてほしい
って言う約束ももう良いや…」

だから、おやすみー

「ぐっ…ツ!!?　クソツ……」

そう言うと藍は眠ってしまった。

「さてと……」

鬼哭がそう溜息をついた後、視線を背後に
向けて

「いつから…聞いていたー」

『妖夢』

鬼哭が妖夢にそう聞くと

『の、能力の辺りから…です……』

やはりか…だから、わざと買い出しを頼んだのに…

「説明してもらいますよ…?　貴方の目の前で

倒れている藍様のことやそしてその能力、

【事象を塗りー「妖夢」】

妖夢が喋ろうとしていたとき鬼哭が妖夢の言葉を遮る。

「白玉楼で話すから今は僕を信じてほしい……」

鬼哭は今は聞いて欲しくないという表情を浮かべて妖夢でも分かった。

「……分かりました。とりあえず、貴方を

信じます……ちゃんと白玉楼に着いたら説明してくださいね？」

「分かった……」

鬼哭が妖夢にそう言った後二人は藍いる場所後にして一緒に白玉楼に帰った。

「おかえりなさいく妖夢に鬼哭」

白玉楼に帰ると幽々子がいつものような無邪気な笑顔出迎えていた。

「幽々子様、ただいま戻りました」

妖夢が言つて幽々子に団子を渡すと

「西行寺殿…申し訳ありません…」

鬼哭はその場に傳いて謝罪をした。

「それは…能力を解放した事かしら？」

それともー」

『親友の式神』に能力を使ったことから？

幽々子はまるでその理由を見透かして

いたかのように笑顔で答える。

「…怒らないのですか…？」

鬼哭は恐る恐る質問をする。

それもその筈、主人である西行寺殿の親友の

式神に攻撃したのだ…

「殺した訳じゃないのでしょうか？」

「えっ？…ええ…酒を飲み過ぎて記憶を忘れる

ように書き換えました」

「なら、良かったわ…でもー」

幽々子は扇子を広げて口元に押さえて少し困った
ような表情を浮かべていた。

「あらあら…まさか、藍をここまで無力化をさせるなんて…」

とある人物はクスクス…と面白い物を見たかのように三日月のような笑顔を浮かべていた。

「それにしても…やっぱり、幽々子は私に隠していたのね…」

スキマで見れていたが…鬼哭って言ったかしら…最初は藍に任せておけば大丈夫だと思って見ていたが…結果は無力化された…

そこはまだ良い…けど、

『人の大切なものを簡単に奪っていく卑怯者』の気持ちなんて分かりたくもない!!?』

非常に不愉快な言葉なのだが…幾つか分かったことがある…

それは――

「紫にバレたかもしれないわ…いや、もう
バレていると思うわ……」

西行寺殿がはつきりと妖夢や僕に言う。

「まさか…西行妖の計画のこともですか!?!?」

心配で気が気じゃなかった。自分のせいで
西行妖が満開にすることが出来なくなつて
しまうのではと不安に押し潰されていく

「大丈夫よ、西行妖の計画はばれてない
みたい……」

良かった…西行妖の計画はバレていなかった
みたいだ…だが、西行寺殿の様子がおかしい…

「心配するのは貴方よ、鬼哭……」

「えっ?」

西行寺殿の言葉で変な声を出してしまった。

「だって、藍がいたのでしょ?」

だったら紫が見てない筈がないわ…それによつて
紫は貴方を邪魔者扱いするでしょうね……」

だから――

その時の西行寺殿は少しだけ悲しそうな表情を浮かべている気がした……

一つ目は鬼哭って言う少女は私と会ったことがあるということだ……多分、書き換えられている可能性は高いと思うけど……

「これが一番の問題ね……」

そう、二つ目は『能力』についてそう、これが一番の問題である……

「【事象を塗り潰して書き換える程度の能力】……かなり厄介な能力ね……」

このままでは幻想郷のパワーバランスが崩れてしまう……

だから、最悪の場合――

『始めましょう、命あるものの訪れぬ冥き地で……』

『終わらせましょう、幻想郷に仇なすものは……』

『亡霊の宴を』

『美しく、残酷に美しいこの地（幻想郷）に散って
もらわないとね…』

その時の紫の表情は親友の幽々子を奪われたのが
原因か藍が倒れてるのが原因か分からないが
『とてつもない程の殺気』で周囲に広げてながら
藍を連れて『スキマの中』に入っていた。

賢者の依頼と人形使い

真っ白に雪が降る白銀の世界で博麗神社も
真っ白に染まっていた。

「よう霊夢!!? 元氣してるかこの魔理沙ちゃんが
見に来てやったぜ!!?」

魔理沙か…相変わらず寒いのに元氣ね…

「あーいらっしやい魔理沙。ほんと妖精って
油断するとどこにでも湧くんだから…」

「寒いから、早く閉めてくれる?」

霊夢は炬燵に引きこもりながらだらしない声で
魔理沙にそう言う

「……」

炬燵に入って蜜柑を食べているやる気のない霊夢
言葉と態度にイラつとしたのか「むむむつ…」と
魔理沙は唸っていた。

「見ろよ、春だつてのにこの冬景色冬の妖精
やら妖怪やらいい加減認めろよ、これは異変だ!」

「今年は春が遅いだけよ…」

「いいや! 何処かに犯人の妖怪がいる筈だ!!?」

「異変解決、妖怪退治が巫女の仕事だろ!?!?」

魔理沙がそう熱を込めて演説していると

「魔理沙の言う通りよ」

霊夢――

そう声が聞こえるとスキマが開いて紫が現れる。

「お前は!!?」

「げっ、紫じゃない……」

魔理沙は驚いた表情を浮かべて霊夢はあまり驚いていないが嫌そうな表情を浮かべていた。

「霊夢、話があるのだけどー」 「どうせ紫も

異変解決のことでしょう?」

紫の言うことを分かっていたと聞いた表情を浮かべて嫌そうな表情を浮かべていた。

「嫌よ!!? 面倒くさい!!?」

「お前、それでも『博麗の巫女』かよ!!?」

「うるさいわね!!? 魔理沙や紫がどんなに言っても異変解決になんて行かないわよ!!?」

と相変わらず霊夢と魔理沙がガミガミと言い争い

を始めている。

「今回は私からこの異変、『春雪異変』と呼べば
良いかしらう？この春雪異変を解決をして欲しくて
『依頼』しにきたのよ……」

「はあ？ どういうことよ……？」

「そうだぜ……紫、お前らしくないぜ？」

霊夢と魔理沙が紫らしくないと言うと

「このままだと春が来なくなるだけじゃない……
幻想郷が崩壊してしまうわ……」

「なっ!?？」

「嘘でしょ!?？ 紫、藍は？ アンタン所の式神が
いるでしょう?？」

霊夢はそう言つて慌てて紫を問い詰める。

「やめろ!!？ 霊夢!!？」

「ッ!!？ 魔理沙……ごめん、動揺してた……」

もし、魔理沙が止めてくれてなかったら
どうなっていたか……

「紫、続けてくれ……」

「ええ、分かったわ……」

「その話し私も混ぜて下さるかしらっ。」

そう背後から声が聞こえてきて振り返ると
メイド服を着てマフラーをしているメイドがいた。

「咲夜!!? どうして此処に!!?。」

「お嬢様にいわれたのよ。異変を解決してこい
って、そしたら貴方達の声が聞こえてきたのよ」

幻想郷が崩壊するってー

「そう、なら良いわ…説明されてもらうわ…」

そう言つて紫が説明した。

今回の異変は紅霧異変よりかなり厄介な異変で
しかも自分の式神までやられてしまったらしい…
やられただけならまだ良い…でも、『その時の記憶
が一切無くなっていた』らしいのだ…

「記憶まで…マジか…。」

「厄介ね…ある意味でチートだわ…」

魔理沙と咲夜が深刻そうに話し合っていると

「記憶の改変…そして、終わらない冬ねえ…」

はあ、分かったわよ…やるわよ!!? 異変解決!!?。」

「おい!!? 待てよ!!? 霊夢!!?」

「待ちなさい!!? 霊夢!!?」

やけくそか霊夢は「ああ!!?もう!!? なんでいつも!!?
いつも!!?」とヒステリックになって飛び出して
いった。それを見た魔理沙と咲夜も追いかけた。

悪いわね…幽々子。

今回ばかりは許してあげる訳にはいかないわ…

例え…『貴方に嫌われることになろうともね…』

紫はそう言って博麗神社にスキマを開けて
入って行った。

その背中は『寂しそうな背中』だった。

「ふ、ふえ、ふえくしよん!!?」

「霊夢、汚いわよ」

「その格好じや寒いだろうに…」

「大丈夫よ、このぐらい……」

霊夢達は宙を浮いてがそう言うとき小さく『桜色の何かが』舞っていた。

「これは何かしら…?」

霊夢がそう言って手に取ると

「桜の花弁か?」

魔理沙がそう言って「どうしてだ?」と唸っていると

「春眠暁を覚えず、かい?」

「どつちかというときあんなららの永眠かな?」

と霊夢が答える目の前の白い髪とエプロンをした女性にそう答えると目の前の女性は傾げる表情で

「私は『レティ・ホワイトロック』っていうけどところで、人間は冬眠しないの?哺乳類のくせに」

「する人もういるけど、私はしないの」

「私もだぜ!!?」

「なんか、無駄に時間を過ぐしててるような気がするわ……」

霊夢と魔理沙はレティに返事する中、咲夜は呆れた表情を浮かべていた。

「ふーん、じゃあ、私が眠らてあげるわ。
安らかな春眠を」

「あくあ、春眠ももつと暖かくなならないとねえ」

「暖かくなると眠るんなら、私達と同じだねあと、馬酔木の花とかも」

「うるさい、あんたみたいなのが眠ればちったあ暖かくなるのよ!」

「横暴だな……」

「横暴だわ……」

「横暴過ぎる……」

「まあ、良いわ…弾幕ごっこを始めましょう」

【冬符】『フラワーウィザラクウェイ』

「ふーん氷の花の弾幕ねえ…でもー」

私の敵ではないわ。

そう言つてレティを打ち負かす。

「あんま、暖かくならないわね。もう少し、
激しい攻撃でもよかったのに」

霊夢はそう言つて春の花弁を手を取つて
霊夢達は更に先へと向かった。

「幽々子様、すべて手はず通りです」

妖夢は幽々子の目の前ある大きな注連縄に縛られて
いる西行妖の前に傳いてそう言うのと

「そう、じゃあ、妖夢は引き続きよろしくね」

「はい、分かりました。幽々子様」

妖夢は幽々子にそう言つてその場を後にした。

「んで、鬼哭、どうだったかしら〜?」

幽々子が鬼哭にそう聞くと

「やはり、八雲紫は博麗の巫女に今回の異変の解決の依頼をしていました。まもなく此処、冥界に来るかと思えます」

「そう、」

なんとしても邪魔をするつもりなのね…紫…

だからって引けないのは私達も同じ…西行妖を満開にしてみせるわ…ツ!!?」

「自分も妖夢の元へ向かった方が
良いでしょうか?」

鬼哭が幽々子にそう聞くと幽々子は扇子を口元で隠して少し考えた後、

「鬼哭、『あれを使いなさい』」

『あれ、ですか…あれで大丈夫でしょうか?』

鬼哭は少し心配そうな表情で幽々子にそう言う
と幽々子はふふつと笑った。

「大丈夫よ、だって貴方を信じっているもの」

「ツ!!? 分かりました…では、その様にして

いきます…」

「よろしくね〜鬼哭〜」

異変が終わった後、みんなで西行妖の下で花見を
してる時にでも彼女の性でも聞こうかしらねえ……

その時の幽々子の姿は無邪気でとても楽しそうな
少女の姿と表情していた。

「夜は冷えるわね。視界も最悪だし」

霊夢達が森の上を飛行しながら喋っていると

「久しぶりね、霊夢、冷えるのは貴方の春度が
足りないからじゃあなくて？」

「アリス!!? アリスもこの異変に!!?」

「魔理沙、知っているの?」

咲夜は魔理沙に聞くとアリスは咲夜を視線を

向けて

『アリス・マーガトロイドよ、よろしくね。
メイドさん』

知らない女性が話しかけてきた。金髪ショートの髪に、青い瞳。服は白いシャツで、ノースリーブの前開きワンピース。それに加えて白いトライアングル・ケープを羽織っている。

『…十六夜咲夜よ』

咲夜は少し警戒しながらアリスに話しかける。

「それはともかく、『春度』って何？」

と霊夢は疑問に思っていたことをアリスに聞く。

「どれだけ、あなたの頭が春なのかの度合いよ」

「なるほど…納得がいったぜ!!?」

「ま〜り〜さ〜…」

「霊夢!!? 魔理沙、あまり霊夢を煽らないで
ちようだい!!?」

咲夜が怒れる霊夢を押さえながらそう言う
魔理沙が「す、すまねえ…私が悪かった……」
と言うと霊夢と咲夜の前に立つ。

「そ、それより!!? 霊夢、咲夜、此処は私に任せてほしいんだぜ!!?」

『魔法使い』相手には『魔法使い』だって決まっているだろ!!?」

魔理沙がそう言うときアリスは溜息を吐いて

「あら、随分と自信満々に言うけど魔術は力（パワー）だって言っているあなたに私は倒せないわよ!!?」

「魔術は力（パワー）だからなあ、アリスも引きこもっていないでたまには外に出るべきだぜ?」

「私は引きこもっていないわよ!!? 街里でいつも人形劇しているじゃない!!?」

「あつ! そう言えばそうだったなあ:」

「す、凄いわね: 魔理沙:」

「ええ、私もそう思うわ:」

凄いと思うわ: 此処まで冷静なアリスを怒らせるなんて: 一種の才能だと思っわ:

霊夢と咲夜がアリスに同情視線を向けているとアリスはそれに察したのか

「そ、それよりも…弾幕ごっこするわよ!!？」

今度こそぎゃふんつて言わせてやるんだから!!？」

「ああ!!？ 私はいつでも相手するぜ!!？」

魔理沙は八卦路を構えて弾幕ごっこの準備をする。

【操符】 乙女文楽

アリスがスペルカードをそう唱えると大玉を自身と自機の間配置した後、そこから人形を生み出してレーザーや弾幕をまき散らすしていく

「ふん、大した事ないぜ!!？」

至る角度から弾幕が放たれているため普通なら避けづらい。弾幕を軽々と避けていく。そして、一分ほど逃げ回っているとスペルカードが終わる。

「くっ……まだよツ!!？」

【蒼符】 『博愛仏蘭西フランス人形』 ツ!!？

アリスの次のスペルカード。

アリスの周囲を4体、6体、10体の人形が周り、青色の鱗弾を一発ずつ放つ。鱗弾は方向を転換し、白色の鱗弾に分裂し始めて更に鱗弾は方向を転換し、赤色の鱗弾に分裂する。弾幕の色の変化はフランスの国旗をちなんているようで綺麗だった。

「いくら魔理沙でも無理でしょうッ!!?」

分裂し終わった弾幕は、私に向けて発射される。私の目の前が、弾幕で辺り一面真っ赤に染まる。しかしそれは、殆ど人形達にしか人生を心血を注いできたまさにアリスらしい繊細で頭を使う『情熱のような赤』だった。

「す、凄え…」

ただその一言に尽きた。

それに見惚れているうちに、弾幕を避けるスペースが無くなっていき、赤い弾幕に被弾してしまう。

「凄いぜ!!? アリス!!?」

【魔符】『スターダストレヴアリエ』ッ!!?

魔理沙はそうスペルカードを唱えると箒に乗ったまま星が出でスピードが上がる。

「ぐっ!!?」

アリスは顔色が変わっていく。魔理沙が此処までするとは思わなかったのだろう

「上海!!? 蓬莱!!?」

『シャンハイ!!?』

『ホラーイ!!?』

上海と蓬莱と呼ばれた人形達が更に魔理沙に攻撃や弾幕をぶつけるが魔理沙はギリギリで避けていく。

アリス、凄えよ…ここまでの人形を一人で繊細に操って本当に凄いし魔法使いとして尊敬する……

確かに魔法や魔術とかは『頭脳』かもしれないだろう……でも、それでもー

『やっぱり、魔法は力（パワー）だぜ!!?』

【恋符】『マスタースパーク』

魔理沙がそうスペルカードを唱えて発射させるが

「上海!!? 蓬莱!!?」

「シャンハイ!!?」

「ホラーイ!!?」

アリスが上海と蓬莱にそう指示出した瞬間、大量の人形達が盾を並べてマスタースパークを塞ぐ。

そのマスターズパークの散り具合はまさに星屑の様であった。

そしてほんの数秒後、スペルカードの効果が切れてしまい

「私の勝ちだな!!?」

「ええ、私の負けね……」

そして魔理沙はアリスのスペルカードを攻略をしてアリスはやれやれといった表情をしながら敗北を宣言して理沙は清々しいほどの笑顔で勝利を宣言をした。

自己犠牲の信念

「藍しやま……」

一人の少女が誰もいないスキマの中で眠っている
藍を心配して看病していると

「橙、藍の様子はどうかしら?」

「あつ!!? 紫様!!?」

橙と呼ばれた化け猫の少女は紫の姿を見た瞬間、
紫の方へと近づいていく

「まだ、藍しやまは目を覚ましません…紫様…」

「そう…」

紫はそう言って眠っている藍を見て『ある物』に
気付く

「橙、これは藍の物かしら?」

「はい…藍しやまが持っていたので多分、
藍しやまのだと思いますけど…」

橙はそう言うと紫は『ある書物』手に取る。
その書物は随分と古いと思われる書物だった。

「これは……」

紫は驚いた。

何故なら、

『塗り潰されている…ッ!!?』

本のタイトルを黒い墨でべったりと
塗り潰されていた。

『■■■家について』ねえ…」

余程、知られたくない内容だったのでしようね…

紫はそう呟いてペラペラとその書物を読んでいく。

すると

「ーッ!!? こゝ、これは…ッ!!?」

紫は先程の冷静な表情が一瞬にして変わった。

「橙…藍を任せて良いかしら?」

「は、はい!!? 紫様もお気を付けて!!?」

橙が紫にそう言った瞬間、紫は持っていた書物を
握り締めながらスキマを開けてスキマの中に

入って行く

『幽々子』と『彼女』を会わせては行けない!!?
もし、この書物に書いてある内容が本当なら
幽々子が危ない!!?

「おーい!!? 霊夢!!? 咲夜!!? 勝ったぜ!!?」

魔理沙が霊夢達がいるであろう後ろを見るが

「あれ…? いない?」

「霊夢達なら弾幕ごっこ始めた瞬間、
先に行ったわよ? もしかして気が付いて
いなかったの?」

おいおい…ツ!!? 嘘だろ!!? いや、待てよ…
この異変を私が解決すれば霊夢や咲夜を見返す
事が出来る筈だ!!?

「…取り敢えず上空でも調べてみたらどう?
上空から花びらが落ちてくるんだから、それを

調べて損はないと思うわよ?」

「なるほど上空か……よし、早速行ってみるか!」

流石、アリスだ!!? ……何故、こんな事に
考えが回らなかったのだろう:

私はそう思いながら箒を手にして上空へと
飛んで行った。

「どこ何処よ……」

「私に聞いても分かるはずないでしょ?」

霊夢と咲夜が道に迷っていると

「春ですよー!はーるでーすよー!」

春なんですよー!」

「あれは……」

金髪または明るい茶髪で、赤いラインの入った
白いワンピースに揃いのとんがり帽子。頭にリボン
を付けている妖精が目の前にいた。

霊夢が見つけたのはこの白銀の世界にいる

筈のない『春告精』がいたのだ。

あれは、確か…『春告精』だったかしら？
彼女に聞いてみるのもありかもね…

「春ですよー！はーるでーすよー！

春なん「ちよと良いかしら？」

「はい？」

春告精は声が出た方へ視線を向けると

「ひい!!？ 博麗の巫女!!？ 退治されちゃう!!？」

私って妖怪や妖怪に恐れられているけど…
そんなに恐ろしいかしら…

霊夢が怯えている春告精を見ながら内心
傷付いていると

「ちよと良いかしら？」

「ふえ…？ わ、私ですか…？」

「そうよ、大丈夫かしら？」

咲夜が春告精に声を掛ける。

「は、はい!!？ 私、『リリーホワイト』と
言います!!？」

リリーホワイトは笑顔で咲夜の返事をする。

「……見ての通り、春が来ない異変なのだけど、
…何か知らないかしら？」

「こ、これ異変だったんですねー！
どうやっても春が来ないわけです…春度が変に
上にながってくわけです……」

「春度？」

「メイドさん達が持っている、その花びらです。
簡単に言うとそのは、『春』という概念が形に
なったものです。それがあればあるほど、
春に近づくんです」

なるほど…つまり、上空から落ちてきている
花卉を頼りにして行けば良いのだ。

「ほら、行くわよ…霊夢」

「……………」

先程のリリーホワイトのやり取りが傷付いた
のかその後、霊夢が喋ることはなかった。

「妖夢、今よろしいでしょうか？」

「は、はい!!?構いません!!?」

妖夢は戸惑いながらも鬼哭に返事する。

「失礼します」

鬼哭はそうやって襖を開けて入って来た。

鬼哭の姿は白でも黒もない『灰色の衣装』に着替えていた。

「んで、何の様ですか？」

少し驚いた表情を浮かべているが…衣装に驚いているが大丈夫なのだろうか？

「遂に『八雲紫』が動き始めた…」

「なっ!?? ゆ、紫様が…」

妖夢は今までにない程に驚いて戸惑っていた。

まあ、無理もないあの妖怪の賢者である八雲紫が自ら動き始めたと聞けばまあ、驚くのも無理はないだろう……

「まあ、目的は二つでしょうね……」

「目的…？」

妖夢は鬼哭の言葉が理解出来ないと言う表情を浮かべていたのを理解したのか「はあ……」と溜息を吐いて説明をする。

魔理沙が上空に上がって行くと何かが見えた。それは十数メートルはありそうな大きくて不気味な扉があった。

「この結界は凄いな。素人にはさっぱり解き方が分らないぜ。何を隠してあるんだか。」

魔理沙がどうしたらいいか考えていると一人の人影が見えた。

「えへへ。企業秘密」

服装は三角錐の帽子、白いシャツの上に、フリルのついたベスト型の服、スカートで赤い服を着た薄い茶髪の人間の姿をした妖怪だった。

「どうでもいいけど、お前は誰だ？」

「そんなことどうでもいいじゃん」

確かに…どうでもいい事だな…

「ああ、どうでもいいぜ。どうせ、倒せば扉が開くんだろ？」

魔理沙が八卦路取り出して戦闘態勢に入る。すると背後から更に二人の人影が見えた。

「リリカのお友達？」

「お友達よ〜」

同じ服装は三角錐の帽子、白いシャツの上に、フリルのついたベスト型の服、スカートと共通。服の色は黒、薄桃の人間姿をした妖怪だった。

「それは良かったわ。」

ようやくリリカにもお友達が出来て」

感動しているところ水を差すようで悪いが…

「早速だが。友達のよしみで、

この結界を解いて欲しい。」

「その前に一曲聴いてからにしない？」

友達のよしみで」

「お代は見てのお帰りよ。友達のよしみの所為で」

「よしみ〜」

友達のよしみか……それに……

「どうにも、あんたらじゃこの結界を

解けそうに無いぜ」

「さあ演奏開始よく姉さん、やつちやいな！」

リリカが勢いよくそう言うが

「お友達なんだから、

たまにはソロでやりなさいよ」

「うえ〜」

「わかったよ、いつでも手助けする」

「手助けは、無用だぜ」

そう言ってプリズムリバー三姉妹と魔理沙の
弾幕ごっこが始まった。

『まず、一つ目が西行妖復活を防ぐこと』

人間の精気を吸う妖桜だ被害はただでは済まない
だろうし、妖怪の賢者、八雲紫が黙っている筈が
ないからだ……

「も、もう一つは……？」

妖夢は戸惑いながら鬼哭に聞くと鬼哭は何の躊躇い
もなく答える。

『僕という『異物』の排除でしょう』

「ツ!!? そ、そんな……」

妖夢は動揺している。

だから言いたくなかったのだ……

「当然でしょう。こんな異常な能力を持っている
異物を排除しようとするのは当然だと思います」

いつ自分の喉元に刃を突き立てられるか
分からないのだから……

「ゆ、幽々子様に紫様の説得をー」

「それは無理でしょう」

鬼哭は妖夢が言っている途中で妖夢の言葉を
容赦なく一刀両断する。

「な、何故ですか!?!?」

「仮に八雲紫を説得出来たとしても今を逃したら

これから先西行妖を満開にする可能性が絶望的に
低くなってしまう…」

だったら、西行妖が満開なる可能性が高い今に
全てを賭けたいー

鬼哭がそう言うのと妖夢は額には脂汗が流れて
落ちて苦悶の表情を浮かべていた。

「さ、西行妖の、何が…」

貴方をそうさせるんですか!!?!?」

妖夢には理解出来なかった。

我が祖父であり師匠である『魂魄妖忌』の
知り合いだけである目の前にいる鬼哭という
彼女のやり方は気に入らなかった。

それはまるで…

『自分自身の命さえ使い捨ての道具』としか
考えていない様な自己犠牲な考えが許せなかった。

「ただの桜好きの一人の少女だよ……」

鬼哭はそう言って寂しそう笑顔を浮かべながら
妖夢がいる部屋を後にする

「よっしゃ!!? 私の勝ちだな!!?」

「ううっ…」

「負けちゃった…」

「悔しい…」

魔理沙とプリズムリバー三姉妹の弾幕ごっこの結果は魔理沙の圧勝だった。

「んで、この扉ってなんだ?」

「知らないで来てたのね…これは幽明結界と
言つて、冥界と現世を隔てる結界。上から飛び
越せば入れるけど…あまりオススメは
しないわね。あなた人間だもの。」

リリカが説明してくれたが、扉なのに上から
飛び越すのか…扉の形の理由あるか?
人間だから、と心配…してくれたりリリカには
悪いが、この中に本物の黒幕がいる気がする。
なら、異変解決者の魔理沙さんが行かない

「理由がないんだぜ！」

「そうか、じゃあな！」

「そういえば春になっても今の時期桜って咲いてるのか？」

と、そんなことを考えながら、魔理沙その結界を飛び越した。

「うわぁ……………」

その中に入り、辺りを見渡すと、思わずそう言葉が漏れた。今は、何か力場が働いているのか、結界の近くだから分からないが、上手く飛べない。それなのに……………」

「何百段あるんだよ……………」

目の前には長い階段。しかし上手く飛べない今、登るしかない。キツくなる事を覚悟を決めつつ、その長い階段を登る事を決意した。

「……………これ何よ。」

「私に聞かないでちょうだい」

私にも分からないものを聞くんじゃないわよ。

私達の目線の先には、大きな扉。霊力を当てて壊すことは出来そうだが、開けることは出来ない、と思うほどに重そうに感じる。

「幽明結界。冥界と現世を隔てる結界……………って

このやり取りさつきもやらなかった？」

目の前に三人の人型妖怪が降り立ち、これの説明を始める。それにしてもさつきって……………？

「えーつと……………魔……………魔理……………魔理沙！

そうそう、やったわ！」

魔理沙……………？もう来てるの？てことは

この子達の服が少し焼けてるのは……………魔理沙のマスタースパークね。

「何、魔理沙一人にやられたわけ？じゃあ

二人には勝てないわ。この先の行き方を教えなさい」

なんとという容赦ない言葉。まあ一人に

やられたなら二人には勝てないでしょうね。

「はいはい……………この結界を上から飛び越せば

いけるわよー」

霊夢のせいで若干拗ねてないかしら？

……私もそんなのに構っておけないから
ほっとくけど。先行して飛び越そうと
している魔理沙を私と霊夢は追った。

境界と墨染

皆さんお久しぶりです!!?

あけましておめでとうございます!!?

今年もよろしくお願ひします!!?

『高評価』、『お気に入り』などして

もらえたらとてもありがたいです!!?

「殺せ!!? ■■■の女を殺せ!!?」

老若男女の村人達が鍬や鎌などを持って今にも
血走った目で『あの方』に刃を向けている。

許せない……

「全部、彼奴のせいだ!!?」

何を根拠にあんなにも優しい『あの方』の
せいだと言うのだろうか……?

理解が出来ない……

いや、むしろ理解したくない……

あの方に刃と殺意を向けると言うのなら――

「妖夢、侵入者ですが大丈夫ですか？
どうやら靈魂達が騒いでいますけど？」

別に妖夢の力を疑っている訳ではないが万が一
のことがある。

侵入者もそうだが、一番の心配は『八雲紫』だ。
あの『神出鬼没スキマ妖怪』言われてが故に今回
の異変が必ずしも成功するとは限らないのだから
……

「はい、ですが博麗の巫女でなければ遅れは
取りません!!？」

博麗の巫女でなければ、か……

妖夢の自信に満ちた瞳を見て鬼哭は

「分かりました…ですが、相手は博麗の巫女
だけではないことを覚えていてくださいね……」

妖夢にそう言うが「大丈夫です!!？ どうか私に
任せてください!!？」と自信満々に言うので妖夢に
任せることにした。

「うわぁ……………」

その中に入り、辺りを見渡すと、思わずそう言葉が漏れた。今は、何か力場が働いているのか、結界の近くだから分からないが、上手く飛べない。それなのに……………」

「何百段あるんだよ……………」

目の前には長い階段。しかし上手く飛べない今、登るしかない。キツくなる事を覚悟しつつ、その長い階段を登る事を決意した。そして、タン、タン、と、靴の音を鳴らしながら、階段を登り始めた。

「はぁ…はぁ……………」

魔理沙はやっと階段を登り切って疲れたのか息を切らしていると白くてゆらゆらと揺れている魂らしきものを抱き抱える『一人の剣士の少女』が入り口の前に立っていた。

「ここは冥界、亡霊達が住まうところ命ある

人間よ、疾くお前たちの顕界に引き返すがよい」

「観念しろ、半人半霊!!? お前たちの企みは調べさせてもらった!!? さあ、春を返して

貰おうか!!?」

魔理沙が妖夢にそう言うと妖夢はクスツと笑い

『人間』風情が何を言うかと思えば博麗の巫女
ならいざ知らず、一体何様だお前は?」

「霧雨魔理沙、普通魔法使いだ!」

魔理沙はそう言って妖夢に向けて八卦路を構えて
戦闘態勢の構えを取ると妖夢も刀を鞘から抜いて
戦闘態勢を取る。

『妖怪が鍛えしこの『楼観剣』に切れぬものなど、
あんまり無い!』

それに……

貴方の言った言葉が虚言かどうかは――

「取りあえず斬れば分かる!!?」

さて、西行寺殿に指示貰わなければ……

鬼哭が幽々子の元へ向かおうとしてると

「見つけたわ…幽々子を唆し誑かす害虫…」

「ツ!!?」

背後から声が聞こえて振り返るとスキマがあつて金髪の女性は笑顔で微笑みながら鬼哭に弾幕攻撃してきていたのに気付いたのか身体のみで軽々と避けた。

「やっと、現れましたか…臆病者の傍観者さん」

鬼哭がそう言うのとスキマにいた女性はスキマから出てきて

「あらあら、傍観者なのは当たっているけれど『臆病者』なんて言うのは初対面の相手に対して失礼じゃあないかしら?」

【結界】《夢と現の呪》

紫は口元を扇子で隠しながら二つの大玉を発射する。すぐに大玉は破裂し、一方は変化する米粒弾を乱射して更にはもう一方は大量の楔弾を発生させながら鬼哭に迫ってくる。

「ちい!!?」

鬼哭は小さな舌打ちをしながら紫の大量の米粒弾や楔弾をギリギリ避けていく

「あらあら、避けるだけじゃなくて貴方の

能力使えば簡単だと思うのだけど？」

やはり、お見通しって訳ですか……だったらッ!!？」

『墨染ノ時雨』

鬼哭がそう言うのと漆黒の錫杖は漆黒の筆に変わり大きな黒い球体を作り出して漆黒の雨となって紫の弾幕を相殺する。

【獄界剣】 『二百由旬の一閃』 ツ!!？」

妖夢が上から発射される青色の大玉を斬り、斬ったところから赤色の弾幕が発生させていた。

「うおっ!!？」

魔理沙はそんな弾幕と斬撃をなんとかして避ける。

「あぶねー…ッ!!？」

【修羅剣】 『現世妄執』

妖夢が左右に移動しつつ、画面全体に何本もの縦の斬撃を繰り出しその剣閃からは画面の中心に向かって縦方向に八の字型の米粒弾が魔理沙に向かって無数に放たれる。

「ちい!!?」

【魔符】『スターダストレヴアリエ』ツ!!?」

魔理沙がスペルカードを唱えながら箒に乗って
その後ろから星屑が出て突っ込むかのように妖夢
のスペルカードと斬撃を辛うじて避ける。

「貴方の目的は何かしら?」

紫は鬼哭を笑みを浮かべながら殺気を隠すことなく
質問をする。

「別に、僕はただ花見をしたいだけですよ?
それにしても妖怪の賢者様が人間一人に警戒し過ぎ
だと思っんですか?」

「貴方が幽々子と妖夢を唆していることぐらいは
分かるわ。それに……」

紫はそう言って冷たい視線を鬼哭に向けて

【結界】『動と静の均衡』

紫がそう唱えると鬼哭を狙う大玉を発射されると
同時に自機の位置に使い魔を設置して設置された

使い魔は周囲に小弾をまき散らす。

『普通の人間が冥界で平気な筈がないもの』

紫は鬼哭に油断せず弾幕を容赦なく放つが

『墨波ノ巖流』

鬼哭がそう唱えると鬼哭の周りから大量の墨が現れて荒波となって紫のスペルカードを相殺した。

「チィ！ まさか私のスペカを相殺するなんて…」

紫は驚きを隠せないという表情を浮かべながら鬼哭を睨みつける。

やはり、幽々子の側に置くのは危険過ぎる……

紫は鬼哭を危険対象と見做した。

「次は僕の番ですね」

鬼哭はそう言うのと巨大な漆黒の筆を振り翳すと

「その程度、対策をしていないと思っっているの？」

「紫は予想通りと言わんばかりに鬼哭の墨の時雨の攻撃をスキマを開いて墨の波を取り込んでいく。

「貴方の墨染なんて効かないわよ？」

紫が余裕な笑みを浮かべていた。

だが、

「そんなに大量な墨染の墨を取り込んでいて
良いのかな？」

「あら、負け惜しみかしら？」

鬼哭がそう言うのとニヤリと笑いながら紫にそう言う
と

「そんな……」

私は『スキマを閉じた覚えはないわ!!?』

紫はスキマが勝手に閉じた状態に驚きを隠せない
表情を浮かべながら一筋の汗を垂らしていた。

「どうしたんですか？ 傍観ばかりしている
賢者さん？」

紫が驚く姿を見て鬼哭はニヤリと笑いながら
余裕を見せる。

「本当に…貴方、イラつかせるの得意みたいね…」

紫は鬼哭に睨みつけながら悪態をついた。

「僕の要望はただ一つ……西行妖を桜満開に
したいだけだ。邪魔しなければ貴方に危害を
加えないことを約束する」

鬼哭が紫にそう言ったが

「貴方はやっぱり危険だわ…一度出直した方が
良いわね……」

紫はそう言った後、スキマを開いてその場を
後にした。